

戸沢正令『更科日記略註』にみる注釈態度

野 口 智 代

一、はじめに

新庄藩第十代藩主であった戸沢正令^(注1)(とざままさよし、一八一三—一八四三)は短い生涯で多くの著書を残している。その著作数は国文学研究資料館で確認すると八十点にのぼり、多くは国学と歌学に関する書が多い。

戸沢に関する先行研究は福井久蔵^(注2)と伊藤雅紀^(注3)が行っているが、二氏は共通して、

一、本居宣長の教えを忠実に受け継ぎ、本居の考えから出ることがない。

二、学問への熱意は著作数より知ることができる。
右のように評価している。

藩主が学問に傾倒すること、特に国学を学ぶことは稀であるようである。福井久蔵『諸大名の学術と文芸の研究』^(注4)には、

漢學に対し国学の勃興は中世以降のことなれば、諸侯にしてその方面に力を盡さんとせしは多からず。田安悠然公が賀茂真淵を招き、紀伊大納言治寶が本居宣長を祿し、大關増業戸澤正令二侯がその方面に輝ける他は寥々たるものなりき。^(注5)

このように記されていることから、戸沢が国学において名を残したということがわかる。

さらに先の福井久蔵の著書には、

諸侯みづから筆を執りて古典を註釋するが如きは多からず。甲府侯柳澤吉保に古今三友抄あり、僻案、密勘余材の説をとりて今案を加へ、その孫信鴻に伊勢物語隨意抄四卷あり、またその家傳たる伊勢物語便閱抄三十卷あり。富山侯前田利保に古今集夜話あり、新庄侯戸澤正令に更科日記註あり、その他管見に入るものは多からず。^(注6)(傍線部筆者、以下同じ)

藩主自ら注釈を行うことは少なかったようである。その中で、戸沢は『更科日記略註』という書を著している。三十一歳の若さで戸沢は亡くなっているが、遺されている著作数を見れば、学問に熱心であったことは明らかである。さらに注釈を行う藩主も少数であったなかで、戸沢が注釈を行っているということを合わせると、戸沢が特殊であったと考えることができるのではないか。

本論文では、戸沢の注釈書である『更科日記略註』を対象とし、検討する。そしてそこから見てくる戸沢の注釈態度を見ていくこととする。

二、戸沢の学問と近世の注釈

『更科日記略註』の検討に入る前に、戸沢の学問と近世の注釈について触れておきたい。

まず戸沢の学問の概要は、新庄ふるさと歴史センターに所蔵されている『草々稿 上のまき』^{注7}より知ることができる。この中に、「おのか学問の大むねをいさ、か世の人にしめさんとす。」から始まる文があり、そこには和歌の道から始まり、本居宣長の『馭戎概言』を読んだことがきっかけで学問を志そうとした戸沢の学問の遍歴を見ることができるとある。

戸沢は村田多勢子、木村定良に師事していた時期がある。しかし、国学を志すこととしたとき、木村と意見が合わず、木村のもとを離れた。その後、月路（築地）にいた当時名の知れた人物であった斎藤彦麿に出会い師事するに至っている。戸沢は斎藤との師弟関係について

初よりこの翁の教をうけなは、今頃はわしのたすけをはなさましかたうてともいはれんを、おそく名つきなくはしそいともくやしき。（句読点筆者）

斎藤に師事することがもう少し早ければと悔いていることから、斎藤から学問の指導を受けたことは、戸沢自身の学問を深める出会いであったようである。

次に近世の注釈についてである。注釈自体は近世以前から行われていた。

高野奈未は、

近世文芸が發展していく背景には古典作品の注釈が欠かせなかった。近世以前は、講釈や写本によって注釈は限られた人々

に継承されてきたが、出版文化の成立と發展によって注釈書や梗概書が多く版行し注釈の享受者は拡大した。内容も初学者向けから細かい考証を行うものまで多岐にわたった。^{注8}

古典の注釈は、これまで一部のみに享受されていたものが出版等の普及により、町人・武士の一般階層にまで広がったとあり、内容も初学者向けから細かい考証を行うまで多岐にわたったと述べている。

鈴木健一は、

「注釈」とは（中略）一般には、『源氏物語』、『伊勢物語』、『古今和歌集』など個々の古典作品についての注釈書を言い、江戸時代における最も代表的なものとしては、北村季吟の『湖月抄』、契沖の『万葉代匠記』、本居宣長の『古事記伝』などがある。（中略）また、考証随筆や創作行為の中にも、古典を新たに解釈しようとする姿勢が認められ、それも一種の注釈でないだろうか。なぜ注釈という営みが必要とされるのだろうか。

まず第一には、時代の変遷とともに、心情・生活様式・ことばといったあらゆる面で、作品に描かれた世界が理解できなくなってくるので、注釈が必要になったと考えられる。

次に、新たな作品を創作するためには、過去の有名な作品についてきちんと理解しておく必要があった、という現実的・技術的な理由も考えられる。中世から江戸時代にかけての注釈書の多くは、和歌をはじめとする創作に益するために作られているという側面も大きい。

第三に、人間や社会のありかたそのものに関わる意味を作品世界に求めようとする姿勢が、中世から江戸時代にかけての注

釈書において顕著になることに触れたい。これらは、表層の解釈はわかるけれども、それ以上に深い何ものかをそこに認めたという欲求によってなされるものである。国学における上代憧憬こそ、そのような考え方にとって、江戸時代を代表する思考法に他ならない。^(注9)

鈴木は、時代の変遷、新たな作品創作、人間や社会のありかたそのものに関わる意味を作品世界に求める姿勢が中世から近世にかけてみられる、この三点が注釈が行われた意味であると述べている。

戸沢がテキストとして選んだ『更科日記』は、版本が元禄十七年(一七〇四)と天保九年(一八三八)に刊行されている。^(注10)戸沢の活動時期を考えれば、戸沢が見たテキストは天保九年版と考えられる。もしくは、戸沢の師である斎藤彦麿写の『更科日記』があることから、この写しを戸沢は斎藤から借り、注釈を行ったとも考えられる。^(注11)同時期の『更科日記』の注釈は、小山田与清が著しているのみである。^(注12)では、次に『更科日記略註』を検討しよう。

三、『更科日記略註』

『更科日記略註』^(注13)は、新庄ふるさと歴史センターに所蔵されているものを閲覧した。戸沢正令による自筆であり、斎藤彦麿による朱書きが見られる。福井久蔵は『戸沢正令候と其著作』で『更科日記略註』の存在を確認しており、有益なものとして後日公にしようと考えていたようであるが、叶っていない。

まず戸沢の注釈は「あつまちの道のはてよりもなほおくかたに」の「あつま」と「あつまちの道のはて」の注から始まる。「あつま」

の注について

あつまはあくのつまの略也。古事記景行天皇の御巻に、日本武尊の到足柄之坂本云々。故登立其坂三歎詔云、阿豆麻波夜故號其國謂阿豆麻也と見え、書紀の同^典卷^典登碓日嶺而東南望之三歎曰、吾婦者耶故因号山東之謂者、曰吾婦國云々。古事記のおもむきとは傳たかへり。さて記伝にこはいつれとも定かたきよしはいはれたり。同書にあつまらはこまかくいへり。相模國をいふよしはいはれ、またひろくいへは、なへて山東の諸國をいふよしはいはれたり。くはしくは記伝の二十七、冠辞考の六とりか鳴の條を見るへし(句読点筆者、以下同じ)

ここでは「古事記」、「日本書紀」の景行天皇紀を引用し、「阿豆麻」について述べている。注釈では『日本書紀』と『古事記』で意図が違うことを述べ、本居宣長の『古事記伝』にはどちらも決め難い理由が述べられていると記している。詳しくは、『古事記伝』、『冠辞考』を見よと記している。ここでは、自身の考えに加え、引証も見られる。次に「あつまちの道のはて」の注には

あつまちの道のはてとは、あつまよりも猶おくといふこと、ろをつよくいひたる詞なるへし。かく都遠き所にまゝ、いてたる人なれば、いかばかりあやしく都人などは思ひつゝ、きをいかに思ひおこしけるにやと、おのか身の事をほのかに書たる也

このように記されており、作者が自分の身について暗に書いていると考えていたようである。この点は戸沢の考えに留まるのみであり、引証はみられない。

「あつま」の注釈については、斎藤彦麿が朱書きにてあつまは字の如く吾婦にて、下の波夜が嘆息也

戸沢が引証として記していた「阿豆麻波夜」について「あつま」が「吾孀」の語をあて、「波夜」は感嘆を示すという指摘をしているに留まっている。

先にも記しているが、『更科日記』の注釈については、小山田与清の書が確認できるのみである。この小山田の注釈を戸沢が見ていたことが伺える箇所がいくつかある。次の表通りである。

	注	本文
①	とうしんは等身にて、壺囊鈔、あつまか、み、また金囊記等に見ゆ。こは与清の説也。おもふにとうしんは道心歟	いみじく心もとなきまゝに、とうしんにやくし仏をつくりて手あらひなとして
②	川柱は□□の門柱といひたるよろし。与清のいふ如川柱にてもきこゆれと、前に門の柱と有にて門柱のかたまさりぬへし	くちもせぬ此川はしら残らすは昔の跡をいかでしらまし
③	ましろまは古今集ねる夜の夢をはかなみましろめはいやはかなにもなりまさる哉、与清は目とろむにて打□たる兒といひたるは、いみじきひかことか。なほたかへし	ましろまし今宵ならてはいつかみんくろとの濱の秋の夜の月
④	いゝさらふは伊皿子ならんと <small>の師説</small> よろしかるへし。いひくろと与清かへるはいたくひかめり。	はるかにいゝ、さらふといふ所

各々の注について述べると、①については「とうしん」について小山田は「等身」と注釈をしていたようである。証拠として『壺囊抄』、『吾妻鏡』、『金囊記』を引いている。小山田の注に対し、戸沢は「とうしん」は「道心」ではないかと考えているが、戸沢の注には引証が見られない。

この「とうしん」の注についても斎藤の朱書きが見られる。

とうしんは佛像にのみいへれば、猶等身にて我身のたけと等しく造りたるなるへし。猶等身の方よくしかるへくや

斎藤は小山田が注で記した「等身」の方が適當ではないかとしている。しかし、それだけではなく「とうしん」は仏像にのみいえる事、自身の身長と同じ作りであるということを付している。この朱書きは斎藤の考えも見える。

②の「川はしら（川柱）」について戸沢は、小山田の注のようにも考えることはできるが、前の文に「門の柱」とあることから「門柱」の方が適當と記している。③の和歌では、「ましろまし」の小山田の注に対し間違ひであるとしているが、戸沢がどのような考えを持っていたかは記されていない。注釈としては不十分であるが、小山田の説を否定していることはわかる。④の「いゝさらふ」については、師である斎藤彦麿の説は適當とし、小山田の説は間違ひであると述べている。②、③、④から、小山田の注釈を否定していることが見られ、戸沢の注釈の一つの特徴であると思われる。

戸沢の注釈はこのほかに次のようなものが見られる。

注	本文
⑤ ひるまよひ等に、契沖師の源註拾遺にひるまよひと書て引たり。然れる本有にや、よひとのみよりは宵居と有かたまさるへし	いかてみはよと思ひつ、つれく なるひるまよひなど
⑥ ひかる源氏の有やう、源氏のものか たりの有さまを人々のかたる也。光 源氏てふ御名のよしは、は、き、の 初段にひかる源氏名のみことくし う云々	ひかる源氏のあるやうなど、ところ くかたるをきくいと、ゆかしさま されと
⑦ 武藏力 □□の名義はあかたる翁武者下とい はれたり。相模は武者□にて、とも に武者のおほきところなるよし也。 上野下野のわかちの如なるへし。師 翁云むなさと地名有はむさしはむ なさしかと	今は武蔵の国になりぬ

⑤については、「ひるまよひ」の注で契沖の『源註拾遺』に「ひるまよひい」と書いて引いているとし、戸沢は「よひ」とだけあるより「宵居」のほうが適當だろうとしている。⑥の「ひかる源氏の有やう」は、源氏物語の有様を人々が語っている様子であること、光源氏という名前の理由について『帚木卷の初段に記されている「光源氏という名は大層な名前であるが」という部分を引証している。⑦の「武蔵の国」については、賀茂真淵と、戸沢が師翁と仰いだ本居宣長の説を引いているに留まっている。

⑤、⑥、⑦では、⑥では源氏物語を引証し、⑤、⑦では契沖や賀茂真淵、本居宣長らが書に記していることを挙げているのみである。戸沢が先人の書を読み、注釈を学び、自身の考えを深め考証を試みていたということが見える箇所である。ただし戸沢の注釈は、記されていた事実の列挙と自身の考察に留まるのみである。

四、おわりに

戸沢の注釈の検討から見えてきたことは次の通りである。

一つ目に、戸沢が『更科日記』の注釈をした理由である。戸沢が注釈を試みる時期に『更科日記』の校本が版行された。当時『更科日記』の注釈は小山田与清のみ行っており、『更科日記』は注釈者が少ないテキストであった。注釈者が少ないことから、古典研究を行う最適のテキストであると考え、戸沢は『更科日記』の注釈を行ったのではないかと考える。

二つ目に、小山田の注釈を戸沢は否定しているが、その理由として学統の違いが挙げられる。戸沢は本居宣長を師翁と仰ぎ、本居の学問を学んでいる。対して、小山田は村田春海に師事していた。古道を究明する本居の学問と、歌を学び古書を解釈する村田春海の学問の違いが背景にある。学問の違いが、戸沢が小山田の説を否定した理由であると考えられる。加えて『更科日記』の注釈を先に著していたのは、小山田のみである。戸沢が自身の説と比較することができたのは小山田の注釈のみであり、そのことも小山田の説を否定する理由となったのではないかと考える。

三つ目に、藩主である戸沢はなぜ注釈をしたのかということであ

る。古典の注釈は、当時の生活様式や言葉などを考えることである。古典文学の注釈を行うことで国学を深く学ぼうとしていたのではない。注釈はその手段であったと考える。

総じて戸沢の注釈は引証が少なく、多くは自身の考えに留まっている。国学を学ぶ上では考証は欠かせない。考証が不十分である戸沢の注釈は未熟であったと考えることができる。

今回検討していないが、戸沢の注釈には斎藤の朱書きが見られる。斎藤の朱書きは概ね戸沢の注釈で記されている考えを肯定している。しかし、先の「等身」の注のような訂正も見られ、斎藤による指導は丁寧に行われていたということが伺える。

今回、注釈書の『更科日記略註』を取り上げ検討した。戸沢は藩主という身分でありながら学問に傾倒していた。そこには戸沢が自身の学問を深めようと試みていたことが見られる。戸沢の著作には、国学に関する書や考証随筆など多くある。今後も、戸沢の著作を検討し、文芸観を詳らかにしていきたい。

注

- (1) 戸沢正令の経歴については、市古貞次ほか『国書人名事典』(岩波書店、一九九三年)に「大名(生没) 文化十年(一八一三) 一月二日生、天保十四年(一八四三) 五月二十二日没。三十一歳。(中略)(経歴) 新庄藩主。天保十一年、襲封。従五位下、能登守。在職四年にして急死。十五歳で村田多勢子に和歌を学び、のち斎藤彦磨に師事。和歌・国学を能くした。」とある。

藩主人名事典編纂委員会編『三百藩藩主人名事典』(新人物往来社、

一九八六年)にも「戸沢正令(とざわ まさよし・一八二^三三^一一八四三) 出羽新庄藩六万石戸沢家第十代当主。天保三年、島津重豪の養女(貢子)と婚姻す。同十一年、父正胤致仕し、十八日正令相続す。正令は国学と和歌の造詣深く、「稷威舍集」「倭魂」「言葉の囚」「日本書紀書伝」等多くの歌集や国学に関する著述を残している。士風を刷新し旧弊を打破して藩政諸般の改革を企図したが、若くして没す。」と記されている。

- (2) 福井久蔵編『戸沢正令侯と其著作』(厚生閣、一九三八年)
(3) 伊藤雅紀『出羽新庄藩主戸沢正令の研究』(皇學館大學出版部、二〇〇九年)
(4) 福井久蔵「諸大名の學術と文芸の研究 上」(原書房、一九七六年)
(5) 「漢學に対し国学の勃興は中世以降のことなれば」とあるが、「近世以降」の間違いであろう。引用に際し原文のまま引用している。
(6) 「新庄侯戸沢正令に更科日記註あり」とあるが、正しくは「更科日記略註」である。
(7) 戸沢正令『草々稿 上のまき』(新庄ふるさと歴史センター蔵、成立年未詳)
(8) 高野奈未『近世における古典注釈学』(日本文学第六一卷十号、二〇一二年)
(9) 鈴木健一編『江戸の「知」 近世注釈の世界』(森話社、二〇一〇年)
(10) 国文学研究資料館国書データベースにて確認。
(11) 国文学研究資料館国書データベースにて、無窮会専門図書館神智文庫に所蔵があることが確認できた。
(12) 小山田与清の注釈書は『更科日記考証』と『更科日記標注』がある。『更科日記考証』は名前が残るのみだが、『更科日記標注』は自筆校

(13)

本が天理大学図書館に所蔵されていることが確認できている。

戸沢正令『更科日記略註』（新庄ふるさと歴史センター蔵、成立年未

詳）

写本、大本（タテ27.7cm、ヒ120.1cm）、一冊、共紙表紙、紙縫り綴じ、外題『更科日記畧註』、表紙に「正令誌、彦磨校」、本文墨付二十二丁、下段に本文、上段に注。虫損有。本文の読みにくいところは岩波文庫『更科日記』（西下経一校注、一九三〇年初版、二〇二〇年第八六刷）に拠った。

謝辞

本論文執筆にあたり貴重な資料の閲覧、撮影を許可された新庄ふるさと歴史センターに厚く御礼申し上げます。